

杉並区立杉並和泉学園
主任教諭 工藤 信輝
教諭 竹内 淑香

効果的な小中のつながりを意識した系統的な指導 ～英語によるコミュニケーション能力の育成～

「使える英語を話せるようになりたい。」「外国の人と英語で実際にコミュニケーションを取れるようになりたい。」中学校へ入学して最初の英語の授業で、生徒たちにアンケートを取ると、このような期待の声が多く寄せられる。彼らは中学校での新しい生活に期待と不安を感じながらも、本格的に学ぶ英語の授業に大きな希望をもって臨もうとしている。この生徒たちの声に目を通して、私がいつもハッとさせられるのは、入学当初、生徒たちは「使える英語」「実践的な英語」を身に付けたいと強く感じているということである。将来に対してのイメージが漠然としているはずの中学校入学当初には、「英語を使って留学したい」「外国の人と友達になりたい」といった具体的な英語の使用場面を思い浮かべて、それを学習の動機とする生徒も少なくない。

しかしながら、3年間の中学校での学びの中で、生徒たちはいつしか「入試に対応し得る英語力を身に付けたい。」「リスニングテストで満点を取りたい。」などと、英語学習の目的や動機が近視眼的になってしまっていることに気付かされるのである。このことは、小学校の外国語活動や外国語科の授業を見ても同じように感じる。外国語活動において、英語の歌やリズム、アルファベットに五感を通してふれながら「好奇心」とともに英語に慣れ親しんでいく低・中学年の児童。あるいは、英語を「書くこと」に対して強いあこがれをもって4線に食いつきながらアルファベットを書く高学年の真剣な姿。これらのような場面に出くわす度に、彼らの、英語を学習することに対する意欲や英語を身に付けることへのあこがれを、いかに中学校を卒業するそのときまで保ち、高めていけるのかと考えずにはいられない。

私はこのことについて思索するとき、生徒の学習への動機付けの問題は中学校での授業の在り方に課題がある、と考えてきた。「英語を使うことが楽しい」と感じることでできた外国語活動から、語彙や文法を暗記して、並び替えや穴埋めばかりさせられるような英語科の授業になってしまっていないか。生徒たちが真に「表現したい」と感じることを表現させてあげられているか。自身の授業を振り返りながら、彼らが入学当初に抱いていた、中学校の英語学習への期待を裏切らないような指導の工夫が果たして十分にできているのかと反省してきた。そのような中、2校目の異動で、ある島の学校へ赴任したことがきっかけで、また別の視点でこのことについて考え始めるようになった。

私が赴任したその島は、人口300人程度の非常に小さい島であった。小学生は30人程度、中学生にいたっては全生徒数が3～4人ほどという極小規模校である。小中学校の校舎は一体化し、職員室も同じ、毎日の生活を児童と共に送る日々がそこにはあった。生徒への指導は2学年しかなかったため、空いている時間で小学校の外国語活動を見学

したり、小学校の先生からの外国語指導に関する相談にのったりする中で、いつしか小学校の先生たちと一緒に外国語活動の指導を行うようになっていった。児童に対する英語の指導は、生徒に対するそれとは大きく異なるものであることに、その頃気づき始めた。

まず、児童は感情に素直である。楽しい活動には、全身で楽しさを表現しながら前のめりに活動に取り組むが、おもしろいと感じられない活動にはまったくのってこない。また、当然ながら難しい言葉や文法の説明ができない中で、英語表現を指導しなければならない。一見楽しそうな活動でも、複雑な内容では取り組むことができない。これが思っていたよりも難しい。中学生であれば「これは覚えて」と一言で片づけてしまいそのようなことも、児童には通用しなかった。

また、児童は身の回りのあらゆることを「英語で表現してみたい」という強い気持ちをもっていることに驚かされた。小学生と毎日かわりをもっていた赴任中は、校庭で見つけた虫の名前や動物園にいる動物の名前、休み時間に友達とした遊びの呼び方、好きな食べ物の名前を何度となくたずねられ、その度に私は辞書を引いたり、インターネットで検索をしたりした。さらに驚くことに、これまで私が聞いたこともなかった名詞や一見読めないような生き物の名前などを、児童は平気で覚えてしまうことも少なくなかった。カマキリを **mantis** と呼ぶことも、この頃小学生に学んだ。



一方で、小学校教員との関わりを通じて、自身の指導や授業を振り返るきっかけとなることも多かった。小学校教員と一緒に授業を考えていくときに、子供たちが興味をもつように題材や素材を選択し、教材の工夫を行ったり、授業で児童が理解しやすいような平易な言葉で説明する教員の姿を見たりする中で、新たな視点を得ることができた。

中でも、もっとも私自身に大きな影響を与えたことは、小学校で何を教えているのか、ということを知ることを通して、中学校で教えることに対する見方が大きく変わったことである。それまでの中学校の授業においては、いわゆる「新出表現」を「初めて教えること」として導入してきた。しかし、中学校で教わる多くの「新出表現」は、小学校の外国語活動（当時）ですでに慣れ親しんだ「既習表現」であることを、この時初めて理解したのである。中学校において「新出表現」として扱う助動詞、疑問詞、不定詞などが、**I can play soccer. I want to be a pilot. What time do you get up?** というような形で子供たちはすでに慣れ親しんでいることを知った。また、文法事項だけでなく、内容面においても同様のことが言えた。中学校の授業でよく行なわれる「1日の中であることを発表する」「**what** を使ったシルエットクイズ」「時差のある時刻をたずねる」「時間割についてたずねる」「将来の夢を発表する」などは、学習指導要領改訂前の外国語活動ですで行なわれていることである（表）。現行の学習指導要領では、当時の内容に加えて、過去形の表現や、「書くこと」（正確には書き写す程度）の指導も小学校で行なわれていることを、中学校教員は意識して指導計画を立てていく必要がある。このことを特に意識もせず、小学校で取り組んだことと同じことを、中学校の英語の授業を行ったり、小学校で学んでいるだろうと思いこんで指導したりすることは、生徒にとって学習意欲を低下させることや、学習に対して困難さを感じさせてしまう大きな要因に

なりかねない。私は、小学校の教員と協働する経験を通じて、5年間（当時）の系統性をもった一貫した英語指導の重要性を真剣に考えるようになった。

このような経験を経て、新学習指導要領の移行期間が始まった平成30年度、私は現在の所属校である杉並区立杉並和泉学園に着任した。本学園も、施設一体型小中一貫教育を実施しているのだが、先の極小規模校から一転、児童・生徒数が1000人近い大規模校への異動となり、それまでのように気軽に小学生とかかわる機会が減ってしまった。とはいえ、前任校での経験を生かしたいと思い、小学校（本学園では「小学部」）外国語専科竹内淑香先生との連携を積極的に図りながら、学期に1回程度の小学部高学年への乗り入れ授業をおこなってきた。高学年へ乗り入れを行なう理由としては、限られた時数の中で小学部への乗り入れを実施する際に、中学部への接続を可能な限り円滑にし、「ギャップ」を軽減させることを優先しているためである。

これまで、試行錯誤を繰り返しながらの小中連携授業を行う中で、少しずつではあるが、1つのぼんやりとした価値観が、確かなものへと変わっていくことに気付いた。それは、小中連携を推進することは、子供にとってのみならず、我々教員にとっても大きな意味があるということである。このことを踏まえ、「小中連携」や「乗り入れ授業」を特別なイベントで終わらせずに、子供の学びにとって有意義なものとするために大切なことを整理してみたいと思う。

小中連携を実践していくにあたり、大切なことは3つあると考える。まず、「小中連携」や「乗り入れ授業」が「特別なこと」ではないと認識すること。次に、小中の教員がそれぞれの役割を明確にし、互いの得意なことを生かし合うこと。最後に、小中の教員がともにゴールとして、そこにいる児童が中学校を卒業するときの姿を思い浮かべながら指導に当たることである。

- 小中連携において大切なこと -

子供にとってのみならず、我々教員にとっても大きな意味がある

「特別なこと」ではないという意識

役割を明確に分け、得意なことを生かし合うこと

共に中学卒業時の生徒の姿を思い描くこと

どうしても「小中連携」や「乗り入れ授業」と言うと、非日常のイベント的なものとして捉えられることが多く、場合によってはネガティブに捉えられる場合もある。しかし、9年間の学びの連続性を考えると、「今」の児童の学びの先にいる中学校教員が、積極的にその児童の「今」にかかわりをもつことは極めて自然なことであるし、「今」学んでいることが、この先どのように発展していくことかを知ることは、児童自身に学習の見通しをもたせる意味でも大きな意義がある。1回1回の授業だけでなく、9年間の系統性や連続性を、広い視野で眺めれば、小中の教員がともに同じ流れ（カリキュラム）に沿って指導にあたることは、なにも特別なことではないのだと考えている。

しかしながら、小学校教員は小学校教員としての役割、中学校教員は中学校教員とし

での役割がある。私が小学校に乗り入れ授業を行うときに特に意識しているのはこの点だ。子供の学びの連続性を考える小中連携では、小学校教員の「児童理解力」と、中学校教員のもつ「教科の専門性」を存分に発揮する必要がある。児童がどのようなことに興味を抱いていて、飽きずに積極的に学習に取り組むことができるのか。どのような言葉を使って説明したり、話したりすることで、伝えたいことが理解できるのか。そういった確たる児童理解の基盤の上に、英語をどのように使っていくのか、正しい音声や表現をはじめ、理想的な書き方や話し方などを効果的に指導するために専門性を生かした教科指導を行っていくことが重要であると考えている。このことから、中学校教員のもつ「専門性」しか生かされないいわゆる「出前授業」は、小中連携の在るべき姿ではないと、私は考えている。小中それぞれの教員の役割を明確にすると、授業を立案するときにも、おのずとそれぞれの役割や立ち位置も決まってくる。児童の実態によって工夫が求められるが、小中の教員の役割と、それぞれの教員と児童との距離感も考慮して、授業を組み立てていくと、一層効果的な乗り入れ授業を実現することができる。

そして、小中の教員がともに授業を考えていく際、まず考慮すべきことは、中学校卒業時の子供の姿である。例えば、小学校での乗り入れ授業で **I want to ~** の表現を学習するときに、その児童が進学する中学校で **want to** (不定詞) を学ぶときにどのような題材を扱っているか、ひいては中学校3年次においてどのような学習活動とのつながりをもつのかなどを考えることが必要である。私が実際に竹内先生と行った乗り入れ授業では、オリンピック・パラリンピックにからめて **What do you want to watch [スポーツ名]?** を扱う単元で、**want to** がどのように中学部で指導されるかを考えた。不定詞の扱いとして、中学校段階では **He tried to do his best.** や **She hoped to be a doctor.** など、**to** 不定詞をとる動詞や、不定詞の目的語となる動詞が非常に多様になる。このことから、この単元において取り入れている活動はどれも、**want** を基本にして、目的語を既習の動詞に入れ替えてさまざまに活用させることで、不定詞の汎用性について気付きをもたせようとすることを潜在的な目標としてもつことを、竹内先生と共通理解を図った。このように中学校段階での学習が一層効果的になるような指導の工夫を、小学校段階で行っていくことができるのが、小中連携での授業実践の強みであると考えている。

また、**want to** の表現について言えば、小学校段階で **I want to be ~** . を使って将来の夢について発表させる活動がある。中学校においては、第2学年で不定詞を扱ったり、第3学年で卒業を前に、将来の夢について語らせたりするなどの活動を行わせることが考えられるが、小中の系統性や連続性を考慮すれば、この活動にも意図的な指導の工夫を取り入れる余地があることに気付く。例えば、小学校では、**I like sports. I'm good at playing baseball. I want to be a baseball player.** などの定型文による短いスピー



的な距離感の差も指導に生かすことができる。インタビュ어나会話の練習などでは、児童との心理

チをさせることがある。文数に着目すると、小学校では3文、中学1年生で5文、2年生で7文、3年生で10文、といったように生徒の実態に応じて、目標を設定できる。また表現に着目すると、小学校段階では定型文を使って独立した3文、中学校2年生段階では because などの接続詞を使って文のつながりを意識させ、3年生では文章全体のまとまりや構成を意識したスピーチの実践などにつなげていくことを小中の教員で共通の目標として設定することが考えられる。そうすることで定型の3文でも、小学校段階で「相手に伝えるなどの目的をもって」、文の順序を考えさせる指導などを通して、最終的に身に付けさせたい「まとまりのある内容」も意識させることができる。

この他にも、指導法や教材などの共有を通して、学習効果を高める工夫を行っている。具体的には、言語材料の習得のための適切なパターンプラクティスの設定、多種多様なアクティビティのアイディアや課題解決的な学習の目標設定等の中学校での実践を、児童の発達段階に合わせて工夫・改善するなど、それぞれの校種における指導法の特徴や長所などを活かしながら、指導法を共有しながら、より効果的な指導を行う。上記の授業実践においては、小学生用と中学校版のそれぞれの「オリンピック・パラリンピック学習読本」を、互いを読み比べ情報を補ったり、学習への動機付けを高めるために中学生用の内容を紹介したりするなど、教材を効果的に活用するための情報共有を行なった。

さらに、小中それぞれの授業で使用するワークシートについても、指導者が変わることによる児童・生徒にかかる負担を極力軽減することをねらいとして、それぞれの校種や学年における児童・生徒の発達段階と学びの特徴を共有・考慮し、大まかなレイアウトや構成を似たものにする工夫を行っている。ワークシートで使用する文字のフォントについても、小学校で使用している教材「We can!」で使用されていた「手書きフォント」を、中学校の生徒向けワークシートなどでも活用することで、アルファベット指導の共通性にもたせ、アルファベットの正しい形を効果的に習得させようと考えている。

同時に、アルファベットを書く4線についても、第2線と第3線の間が他よりも大きく取られているユニバーサルデザインを小中のワークシートで共通して採用することや、段階的に線の間隔を狭めていくことなどの工夫(図)を行うことで、学びの連続性の実現を図っている。

(図)段階的に幅を狭めるワークシートの工夫(実際のサイズ)

【小6段階】

【中1段階】

※竹内淑香先生作成

【中 2 段階】

【中 3 段階】

Q & A 本文の内容に関する各質

① Did Saki enjoy Deepa's boo

① (a T-shirt, I bought yesterday)

指導者の指導観や個性を制限するような「スタンダード」の設定には反対するが、学習者である児童・生徒が不要なストレスを感じることなく、また 9 年間を通じた英語科学習の最終目標である「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ」ながら、「簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力」を育んでいく上で必要な共通理念などは、積極的にすり合わせながら指導の中に生かしていこうと試みている。具体的には、「外国語は間違えながら習得していくもの」という共通理念をもって指導に当たることや、間違いが許される教室の雰囲気醸成、「アイコンタクト」「明瞭な声量」「笑顔」などのノンバーバルコミュニケーションの重要性などを一貫して指導の際に心がけていくことなどが非常に重要であると考えている。

最後に、平成 30 年度「英語教育実施状況調査」(文部科学省)では、小学校との連携に取り組んでいる中学校の割合は 80.6%を占めるが、そのうち、小中連携したカリキュラム作成に取り組んでいる中学校は、わずか 16.4%に過ぎなかった。同調査では、特に小中連携したカリキュラム作成に取り組んでいる中学校の生徒の英語力が高い傾向にあることも述べられている。小中の教員が連携して共に授業づくりを進めていくことは、児童・生徒の学習にかかる負担を軽減したり、9 年間の学びの系統性・連続性を最大限に生かし、学習効果を高めたりするだけでなく、私たち教員自身の学習指導力を高め、児童・生徒理解を深めていくことができるということを、これからも小中連携の実践を重ねながら、1 人でも多くの先生方に伝えていきたいと思う。

(表) 外国語活動(平成 20 年告示 学習指導要領)における指導内容

表現	目標 「活動例」
Hello. My name is ～. What's your name?	英語での挨拶や、自分の名前の言い方に慣れ親しむ。「名刺を作ろう」
How are you? I'm happy.	感情や様子を表したり、たずねたりする表現に慣れ親しむ。「ジェスチャークイズ」
How many pencils? Five pencils.	英語でのものの数え方の特色を知り、1～100 の数の言い方に慣れ親しむ。「ビンゴゲーム」
I like ～. I don't like ～. Do you like ～? Do you have ～? Yes, I do. /No, I don't. What do you like? What animal do you like?	好きなものや嫌いなものを表わしたりたずねたりする表現に慣れ親しむ。 「先生の好きなもの嫌いなものを知ろう。」

What do you want? What do you want to be? Where do you want to go?	欲しいものをたずねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。 「カード集めゲーム」
What time do you get up?	生活を表す表現や、一日の生活についての時刻をたずねる表現に慣れ親しむ。「何時か当てよう」「メモリーゲーム」
What's this? It's a piano.	ある物が何かとたずねたり、答えたりする表現に慣れ親しむ。「シルエットクイズ」「スリーヒントクイズ」
I study ~ on ~. What do you study on ~?	時間割についての表現やたずね方に慣れ親しむ。 「カルタ」「カード並べゲーム」
What would you like? I'd like a hamburger.	時間割についての表現やたずね方に慣れ親しむ。 「ランチメニューを作ろう」
When is your birthday?	英語での月の言い方や、誕生日をたずねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。 「ステレオゲーム」「カレンダービンゴゲーム」
I can/can't ~. Can you ~? Yes, I can./No, I can't.	「できる」「できない」という表現に慣れ親しむ。 「先生のできること・できないことを知ろう。」 「ジェスチャーゲーム」
Where is the school? Go straight./ Turn right.	目的地への行き方をたずねたり言ったりする表現に慣れ親しむ。「Turn right.ゲーム」「友達を案内しよう」

(文部科学省 “Hi, friends!” 関連資料 年間計画例を参考に作成)

参考資料

- ・平成 30 年度「英語教育実施状況調査」概要 (文部科学省)
- ・平成 30 年度「英語教育実施状況調査」参考資料 (文部科学省)
- ・“Hi, friends!” 関連資料 年間計画例 (文部科学省)